

(74) MnO-FeO スラグと溶鉄間のMn, Oの分配平衡

日新製鋼 真製鐵所

工博 藤田春彦

○ 丸橋茂昭

圓転るつぼ溶解炉にて、マグネシアるつぼを用いてMnO-FeOスラグと溶鉄を、 1560°C で平衡させ、スラグと溶鉄間のMn, Oの分配について測定した。スラグ中のMgO%は0.30%以下であり、スラグはほぼMnO-FeO2元系とみなせる。

溶鉄内酸素量はスラグ中MnO%は36%までは直線的に減少し、36%以上実験値の範囲内では一定値；0.126%にとどまる傾向が認められた。 $\text{MnO} \rightarrow 0\%$ に内挿し求めた純FeOスラグと平衡する0%と任意組成のMnO-FeOスラグと平衡する0%との比として α_{FeO} を求め、スラグ組成との関係を示せば図のごとくなる。FeOが約64 mol%までの均一融体スラグの下では、 α_{FeO} はほぼRaoultの法則にしたがい、MnO-FeO系スラグはほぼ理想溶液とみなせることがわかつた。MnOが36 mol%以上の固体-液体の二相共存範囲では

$\alpha_{\text{FeO}}(\text{MnO-FeO 固溶体}) = \alpha_{\text{FeO}}(\text{MnO-FeO融体})$ であり、 α_{FeO} はスラグ組成にかかわらず一定である。

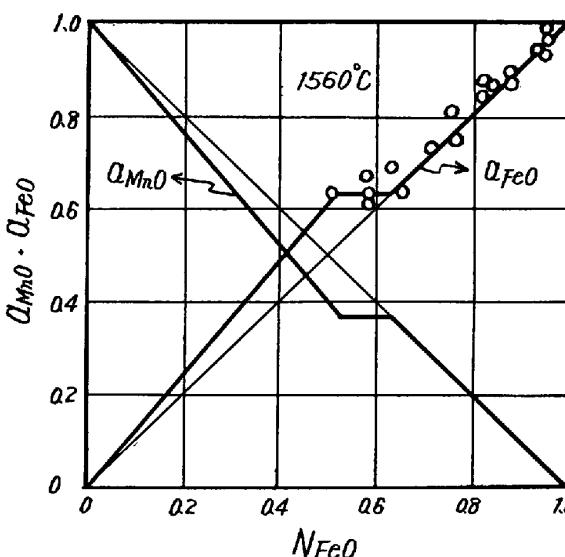
FeOの溶融エンタルピー- $\Delta H_f^{\text{FeO}} = 8.500 \frac{\text{cal}}{\text{mol}}$ とし、かつ均一固相内においても各成分は理想挙動を示すものとして固溶体範囲の溶融純FeOを基準とした α_{FeO} を求めた

。このようにして得られた α_{FeO} とスラグ組成の関係から溶融純MnOを基準にして α_{MnO} とスラグ組成の関係を求めた。

$\text{FeO} + \text{Mn} = \text{MnO} + \text{Fe}$ の平衡恒数を求めた。スラグが液体範囲では 1560°C において $K_{\text{Mn}}^l (= N_{\text{MnO}} / N_{\text{FeO}} (\% \text{Mn})) = 4.45$ である。また図に示す α_{MnO} と N_{MnO} の関係からMnOの溶融エンタルピーを求めた結果 $\Delta H_f^{\text{MnO}} = 12700 \frac{\text{cal}}{\text{mol}}$ となつた。このようにして得た ΔH_f^{MnO} あるいは ΔH_f^{FeO} 実験により与えられた K_{Mn}^l から固体スラグと平衡する場合の平衡恒数 K_{Mn}^s を推定した。その結果 $K_{\text{Mn}}^s = 7.87$ となつた。

$K_{\text{Mn}}^l, K_{\text{Mn}}^s$ より液体、固体スラグと平衡する場合のMn, Oの関係を求めた。 1560°C においては $Mn < 0.125\%$ では、平衡スラグ相はMnOが36 mol%以下の液体、これよりMn%が高い範囲ではMnOがほぼ49 mol%以上の固溶体である。また $Mn = 0.125\%$ の溶鉄と平衡するスラグはMnOがそれぞれ36, 49 mol%の液体、固体スラグが共存し、かつその平均組成が両相の存在割合によってMnOが36~49 mol%である。

スラグと溶鉄のMn, Oの分配平衡に関する実験値、 $\Delta H_f^{\text{FeO}} = 8500 \frac{\text{cal}}{\text{mol}}$ とを組合せて得られたMnO-FeO系の 1560°C における固相、液相の存在領域はSchenck et al.によって求められた状態図と比較的一致した。



MnO-FeO系における $\alpha_{\text{FeO}}, \alpha_{\text{MnO}}(1560^{\circ}\text{C})$
いずれも溶融純物質基準